

「非連続型テキスト」を活用した
「書くこと」の指導に関する研究
—授業モデルの構築とその効果—

2015/3

四日市市教育委員会 教育支援課

はじめに

第2次四日市市学校教育ビジョンの取り組みも、平成23年度の開始から4年が経過し、新たに第3次のビジョンを策定する時期となりました。

現学校教育ビジョンでは、『生きる力』『共に生きる力』をはぐくむ』を基本理念に、「めざす子どもの姿」である「輝く よっかいちの子ども」の実現をめざしてきました。そのために、「段差のない教育」「途切れのない支援」「家庭・地域との協働」の3つの視点を基盤として、「問題解決能力の向上」「豊かな人間性の育成」「特別支援教育の充実」「教職員の資質・能力の向上」等、8つの重点目標を掲げ取り組んできました。

教育支援課では、学校教育ビジョンの実現に向けて、教職員の資質・能力の向上をめざして取り組みを進めてきました。

とりわけ、教職員一人ひとりが、ライフステージに応じた専門性・多様な指導技術・幅広い教材研究・深い子ども理解等の教師力を身につけるため、「教師力向上研修」を用いた自己分析をもとに、研修の充実を図ってきました。

また、昨年度市内小中学校に「問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック」を配付し、これを活用して問題解決能力の育成をねらう授業改善にも取り組んできました。確かな学力を育むためにも、今後もさらに力を入れて、この取り組みを進めていきます。

これらの取り組みに加えて、本市の課題である「言語活動の充実」「不登校児童生徒支援の充実」及び前述した「問題解決能力の向上を図る学習の推進」を本年度研究課題として設定し、授業実践や調査・研究を進め、その成果をここに研究調査報告書としてまとめました。これらの研究成果が、教育課題の解決に向けた学校・園の研修・研究において活用されるとともに、日々の教育実践に役立つことを期待します。

最後に、本課の研究調査を進めるにあたって、御指導・御助言いただいた国立教育政策研究所初等中等教育研究部の松尾知明総括研究官、並びに研究協力員をはじめとして調査・実践面で御協力いただいた学校等の関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

平成27年3月

四日市市教育委員会教育支援課
課長 田中 重行

－ 目 次 －

I	研究主題	1
II	主題設定の理由	1
III	研究の目的	2
IV	研究の内容と方法	
1	研究の内容	2
2	研究の方法	5
3	研究計画	5
V	結果と考察	
1	授業モデルに基づく授業実践	6
2	結果	11
3	考察	15
VI	研究のまとめ	
1	研究の成果	16
2	研究の課題	16
	[引用文献・参考文献]	17
	[資料]	18

I 研究主題

「非連続型テキスト」を活用した「書くこと」の指導に関する研究

－ 授業モデルの構築とその効果 －

II 主題設定の理由

現代社会には多くの情報があふれている。実生活においても、文章だけのものよりも、グラフ・図表・写真等が含まれるものを目にすることが多い。その中から必要な情報を取り出し、それを正確にとらえたうえで、目的に応じて情報を取捨選択して読むこと、さらに自分の考えをまとめて発信する能力が求められている。

全国学力・学習状況調査でも、B問題で「活用する力」が問われ、そのテキストとして「非連続型テキスト」を使った問題が出題されている。「平成26年度全国学力・学習状況調査報告書 中学校国語」によると、根拠として取りあげる内容を正しく理解したうえで活用する点や、文章や資料から取り出した情報を用いて伝えたい内容を適切に説明する点に課題があることが指摘されている。本市においても、「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしていますか」の質問に対する肯定回答は53.2%で、全国値より2.9ポイント低い結果であった。

また、本市の全体的な傾向から見られる課題として、「書く力」があげられる。同調査において、中学校国語の平均正答率は全国平均をわずかに上回っているものの、B問題の「書くこと」の領域では課題が見られた（本市40.6%・全国41.0%）。これらの問題はすべて記述式である。選択式や短答式の問題に比べて記述式問題の無回答率は高く、特に、「資料から適切な情報を得て、伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書く」問題については18.2%であった（本市の中学校国語B問題の無回答率の平均は4.0%である）。さらに、「今回の国語の問題について、解答を文章で書く問題がありましたが、最後まで書こうと努力しましたか」という質問に対して、「最後まで努力した」は70.0%、「途中であきらめた」は25.2%、「全く書かなかった」は4.2%という結果であった。

そこで、本研究では、中学校国語科の「書くこと」の指導に焦点をあてる。教材として「非連続型テキスト」を活用することとする。庄司（2011）は、『非連続型テキスト』は論理的に図式化された言語ととらえると、それを『読む』『考える』『表現する』活動は、言葉を駆使する力をつける、言語能力に結び付けるという国語の教科のねらうところに合致するものである」とし、「非連続型テキスト」を国語科で取りあげる意義を記している。「非連続型テキスト」は、「書くこと」や文章自体を読むことに苦手意識をもつ生徒にとっても取り組みやすく、抵抗感を軽減することができる教材である。視覚的な効果もあり、生徒の興味・関心を喚起することも期待できると考える。

本研究の意義は、「非連続型テキスト」を活用した授業が、「書くこと」の指導に効果的であることを示すものである。授業モデルを構築し、その効果について検証を進める。

III 研究の目的

本研究の目的は、中学校国語科の「書くこと」の領域において、「非連続型テキスト」を活用した指導の授業モデルを構築し、その実践による効果を検証することである。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 「非連続型テキスト」について

PISA 型「読解力」は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義されている。文部科学省が取りまとめた「読解力向上プログラム」(2005)には、PISA 型「読解力」の特徴の一つとして「テキストには、文学的文章や説明的文章などの『連続型テキスト』だけでなく、図、グラフ、表などの『非連続型テキスト』を含んでいること」と示されている。

「非連続型テキスト」とは「データを視覚的に表現した図・グラフ、マトリクス、技術的な説明などの図、地図、書式など」のことである。その活用方法としては、非連続型テキストそのものを読む、複数のテキストを比較して読む、連続型テキストと関連づけて読むなど、さまざまな学習活動が可能である。小林(2011)は「非連続型テキスト」の活用場面として、「連続型テキストと組み合わせてテキスト全体を理解する」「非連続型テキストをもとに物語を作る等、創作の資料とする」「発信したいことを効果的に伝えるための資料とする」といった、「理解」「創作」「発信」の3つを示している。

(2) 「読むこと」と「書くこと」との関連

PISA 型「読解力」の特徴の一つとして、「テキストを単に『読む』だけではなく、テキストを利用したり、テキストに基づいて自分の意見を論じたりするなどの『活用』も含んでいること」もあげられている。

右記は、「読解力」育成のための「指導の改善の方向」を踏まえて、「指導のねらい」を7つに分類したものであり、「読む力」とともに「書く力」を高めること、さらに、そのための学習の機会を充実することが示されている。また、「読解力向上プログラム」にも「読む力、書く力を総合的に高めていくプロセスを確立すること」の重要性が示されている。

指導のねらい(文部科学省 2007 「『読解力』向上に関する指導資料」から)

ア テキストを理解・評価しながら読む力を高めること

- (ア) 目的に応じて理解し、解釈する能力の育成
- (イ) 評価しながら読む能力の育成
- (ウ) 課題に即応した読む能力の育成

イ テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること

- (ア) テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成
- (イ) 日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成

ウ 様々な文章や資料を読む機会や、

自分の意見を述べたり考たりする機会を充実すること

- (ア) 多様なテキストに対応した読む能力の育成
- (イ) 自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

(3) 学習指導要領より

資料の読み取りや情報活用に関わる内容をまとめたもの〔第1学年〕

「中学校学習指導要領解説国語編」

(「中学校学習指導要領解説国語編」から)

(2008)では、「読むこと」の領域「読書と情報活用に関する指導事項」として、「第1学年では目的に応じて必要な情報を読み取ること、第2学年では情報を基に自分の考えをまとめることを示している。第3学年ではこれらを総合して、目的に応じて本や文章などを読み、知識を広げたり、考えを深めたりすることを示している」と明記している。

「読むこと」

- ・本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身に付け、目的に応じて必要な情報を読み取ること。(読書と情報活用 カ)
- ・文章と図表などとの関連を考えながら、説明や記録の文章を読むこと。(言語活動例 イ)

「書くこと」

- ・集めた材料を分類するなどして整理するとともに、段落の役割を考えて文章を構成すること。(構成 イ)
- ・図表などを用いた説明や記録の文章を書くこと。(言語活動例 イ)

各学年の指導事項を踏まえ中学校3年間を見通した学習活動を組み立てていくことが重要であるが、そのためには、まず第1学年での学習が基盤となる。学習指導要領に示されている指導事項・言語活動例から、資料の読み取りや情報活用に関わる内容を抜粋しまとめると上記の通りである。第1学年では、資料の活用に慣れ情報の読み取り方を身につける指導をすることになっており、「非連続型テキスト」への対応を意識した言語活動例があげられている。「中学校学習指導要領解説国語編」にも記されているように、「読むこと」と「書くこと」には相互に密接な関係があり、各領域の目標を関連づけるとともに、両者を総合的に高めていく指導が行われるよう配慮されなければならない。

(4) 授業モデルの構築

「読むこと」を「書くこと」への一連のプロセスととらえることや、「読むこと」の活動の中で「書く力」をつける指導を組み立てていくことが必要であると考え。そこで、本研究では「非連続型テキスト」を活用し、「読むこと」と「書くこと」の関連を図った授業モデルを提案する【図1】。第1学年を対象とし、「つきたい力」を「テキストから必要な情報を読み取る力」「伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書く力」「テキストを利用して自分の考えを書く力」の3つとする。具体的な手だてとして、以下の5つを示す。

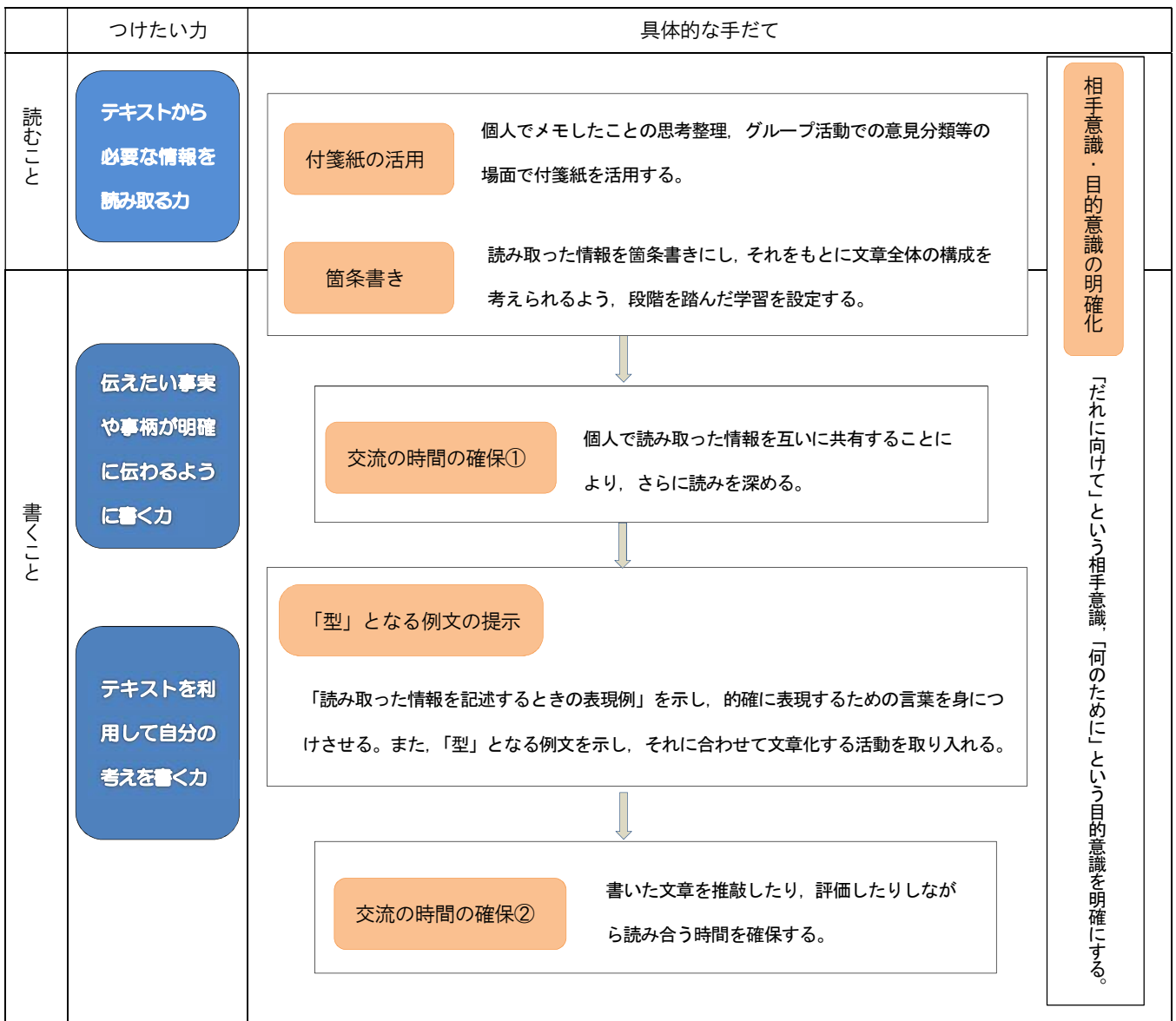
相手意識・目的意識の明確化：同じ題材で書く際にも、読み手（相手）によって書く内容や表現の仕方は異なる。「だれに向けて」という相手意識、「何のために」という目的意識を明確にもたせて、授業を行う。

付箋紙の活用：テキストから必要な情報を取り出す際、付箋紙を活用する。個人でメモしたことの思考整理、グループでの意見分類等に有効である。石井（2010）は、「書くスペースが小さいので、書くことの抵抗が少ない」「1枚の紙を埋めたという達成感を積み重ねることができる」「付箋紙を取捨選択したり、順序を入れ替えたりしやすい」等、付箋紙活用の長所をあげている。

箇条書き：文章にまとめる前段階として、読み取った情報を箇条書きにし、それをもとに文章全体の構成を考えられるよう段階を踏んだ学習を設定する。森川(2010)は、「書くこと」に苦手意識をもつ生徒にとって、「書くこと」の「入り方」に全力を注ぐことが重要で、それには箇条書きが効果的であると述べている。

「型」となる例文の提示：「読み取った情報を記述するときの表現例」を示し、的確に表現するための言葉を身につけさせる。また、「型」となる例文を提示し、それに合わせて文章化する活動を取り入れる。汎用性の高い「型」を示し、繰り返し使うことで「書くこと」への抵抗感を軽減する効果も期待できる。

交流の時間の確保：小グループや全体で交流する時間を確保する。読み取った情報を共有したり、書いた文章を推敲・評価しながら読み合ったりすることで、自分の表現の参考にしたり、考えを広げたりする時間とする。



【図1】 「非連続型テキスト」を活用した「書くこと」の指導の授業モデル

2 研究の方法

(1) 調査対象

四日市市内の中学校に依頼し、1年生2クラス（53人）を調査対象として研究を進める。

(2) データの収集と分析（検証方法）

① プレテスト・ポストテスト【資料1】

全国学力・学習状況調査（平成20年小学校国語A問題）をアレンジしたプレテストを実施し、「資料を読み取る力」「書く力」の実態を把握する材料とする。また、検証授業後に同一の問題を用いたポストテストを実施し、その変容を検証する。

② 生徒対象の意識調査【資料2】

検証授業前（10月15日）に、「資料の活用」と「書くこと」に対する生徒の意識について質問紙による調査を実施する。また、検証授業後（11月21日）にも同様の調査を実施し、意識の変化を検証する。

③ 個人の変容に対する分析

プレテストと事前の意識調査をもとに、「書くこと」を苦手とする生徒数名を抽出し、個人の変容に対する分析を行う。「書くこと」に対する意識の変化、「資料を読み取る力」「書く力」の変容を検証する。

④ 振り返りカード【資料3】

各時の終わりに、振り返りカードを記入することで自己評価をさせる。学習を振り返り、次時への意欲づけとする。

⑤ 研究協力員からの聞き取り

検証授業前に研究協力員から、「生徒の国語に対する興味・関心」「資料の活用」「書くこと」について聞き取りを行い、現状を把握する。また、各時の授業後、生徒の活動の様子等について情報を共有し、指導の効果分析の参考とする。

3 研究計画

研究計画は、以下の通りである。

月	本研究に関する計画	実施する内容・研究協力校との連携
4	課題研究打合せ会	
5	第1回課題研究会議（第1回国研指導）	

6	第2回課題研究会議	研究協力校への依頼
7	第3回課題研究会議（第2回国研指導）	
8	検証授業の準備	
9	検証授業の準備	
10	第4回課題研究会議	事前調査の実施（生徒対象意識調査、プレテスト）
11	検証授業	検証授業 事後調査の実施（生徒対象意識調査、ポストテスト）
12	第5回課題研究会議（第3回国研指導）	
1	第6回課題研究会議（第4回国研指導）	
2	第7回課題研究会議	

V 結果と考察

1 授業モデルに基づく授業実践

授業モデルに基づき、研究協力校1年生を対象に全4時間の授業を行った。第1次から第3次にかけて難易度を段階的にあげながら、さまざまなタイプの資料を教材として用いた。

(1) 指導計画（指導案は【資料4】【資料6】【資料9】）

	題材/テキストの形式	ねらい	つきたい力	手だて
第1次 (1時間)	「方言分布図」を 読もう！	・資料から必要な情報を集めるための読み方を身につける。(1年「C読むこと」カ)	・テキストから必要な情報を読み取る力	・相手意識・目的意識の明確化 ・付箋紙の活用
	非連続型テキスト (方言分布図)	・資料から必要な情報を集めて、わかったことを的確に表現する。 (1年「B書くこと」イ)	・伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書く力	・「型」となる例文の提示 ・交流の時間の確保
第2次 (1時間)	新聞記者になろう！	・新聞記事の文章、図表、写真を関連づけて読み、情報を集める。 (1年「C読むこと」カ)	・テキストから必要な情報を読み取る力	・相手意識・目的意識の明確化 ・「型」となる例文の提示
	混成型テキスト (文章・写真・表で構成された新聞記事)	・読み取った情報をわかりやすく伝えるための工夫をして、文章を書く。 (1年「B書くこと」イウ)	・伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書く力	・交流の時間の確保
第3次 (2時間)	資料をもとに提案しよう！	・複数の資料から必要な情報を収集し活用する。(1年「C読むこと」カ)	・テキストから必要な情報を読み取る力	・相手意識・目的意識の明確化 ・箇条書き
	非連続型テキスト (グラフ)	・集めた材料を整理して、文章の構成を工夫する。(1年「B書くこと」イウ)	・テキストを利用して自分の考えを書く力	・「型」となる例文の提示 ・交流の時間の確保

※ねらいの（ ）は、学習指導要領に記載する指導事項

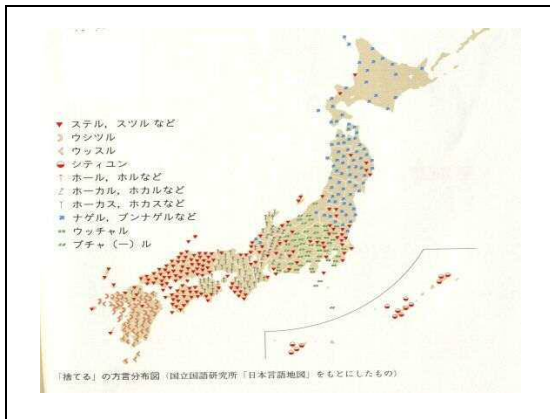
(2) 実践の様子

① 第1次 「『方言分布図』を読もう！」

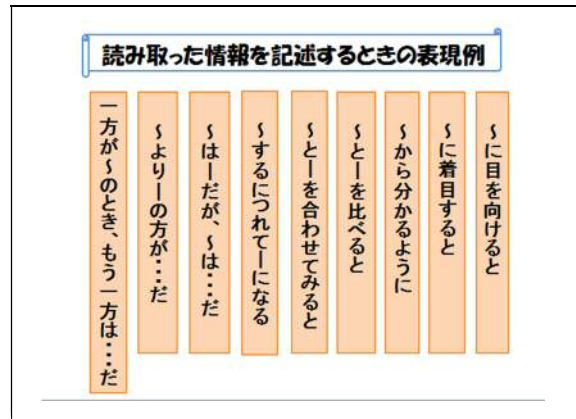
「捨てる」の「方言分布図」【図2】を提示し、そこから読み取った情報を付箋紙に書き出す活動を行った。「～と～を比べると」「～より～の方が・・・だ」等、「読み取った情報を記述するときの表現例」【図3】を提示し、これらの表現を使って書くよう指示した。ほとんどの生徒が配布された3枚の付箋紙に、個人の気づきを書き出すことができた。振り返りカードの記述からも読み取った情報を文章化することを難しいと感じた生徒は多くいたが、いくつかの例を提示したことは表現するうえでのヒントとなり得た。

各自の付箋紙を読みあげながら台紙に貼り、班で情報を整理した。「あー」「本当？」と反応を示したり、再度「方言分布図」を見直して確認したりしながら交流を進める班もあった。その後、付箋紙の中から4つを選びホワイトボードに記入していく。うち1つは嘘の情報を入れることを条件とし、クイズ形式で他の班の嘘の情報を当てる活動を行った。嘘の情報を考えたりそれを見抜いたりするためには、より注意深く資料を読み取ることが求められる。目的意識が明確になり、意欲的に取り組む姿が見られた。しかし、各班から出された表現の違いを比較するなど、読み取った内容を確認する時間は十分に確保できなかった。

「資料から何かを読み取るのはおもしろい」「難しく考えなくても、資料から気づくことはたくさんあった」という感想が目立った。また、「資料を使うと、相手にわかりやすく伝えられることがわかった」と資料の効果について考えられる生徒もいた。



【図2】 光村図書「国語2」P204「方言と共通語」



【図3】 「読み取った情報を記述するときの表現例」



授業の様子 (第1次)

② 第2次 「新聞記者になろう！」

相手意識・目的意識をもたせるため、新聞記者となって活動することを知らせて学習を始めた。「仁川アジア大会男子サッカー決勝トーナメント進出」に関する新聞記事【資料7】を用いて、文章・写真・表を関連づけて読む授業を展開した。

写真を拡大提示して全体で確認したあと、新聞記事の文章から写真に対応する部分を探す活動を行った。次に、日本以外の3カ国の視点に立って勝敗表を読み取って記事を書き、さらに見出しをつける活動へとつなげた。勝敗表を見るのが初めてで理解するまでに時間を要する生徒も数人いたが、あきらめずに資料に向き合う姿が見られた。ワークシート【資料8】に日本チームの視点で書かれた記事を示したため、その例文に照らし合わせながら書くことができていた。さらに、記者の立場としての意見や気持ちを記したり、新聞記事の表現を引用したりと、生徒それぞれが工夫する様子が見られた。早々に書き終えた生徒2人が、教師にアドバイスを求めに行き、何度も推敲する意欲的な姿もあった。各自が書いた記事と見出しを発表し合う形で、交流の場を設定した。写真や表があることで読み手にわかりやすく伝えることができることに気づく生徒や、どのような見出しが人を引きつけるのかについて考える生徒もいた。生徒からは、「見出しは結果を書くだけではなく、『惜しくも』や『残念』など感情を表す言葉を入れることでより良くなることがわかった」「どう書いたら読む人に伝わるのかを考えることが楽しかった」「違う視点から新聞を書くことは難しいけど楽しいと思った」「同じ物事でも、人によって見出しや記事の書き方が違うこと、いろいろなことが読み取れることがわかった」「普段新聞を読まないのでも少し大変だった。これから新聞を読んでいこうと思った」等の感想があった。



授業の様子（第2次）

③ 第3次 「資料をもとに提案しよう！」

単一の資料だけでなく、目的や意図に応じて複数の資料の中から必要な情報を取り出したり、それらを関連づけて読んだりすることが求められる場面も多い。第3次では、複数の資料を順次提示していき、それをもとに提案文を書く学習を行った。

第1時では、まず、「1カ月に本を一冊も読まない人の割合」を示す資料【図4】を提示し、ワークシートに読み取った情報を箇条書きにする。第1次の学習を思い出し「読み取った情報を記述するときの表現例」を参考に



【図4】 第3次で提示した資料

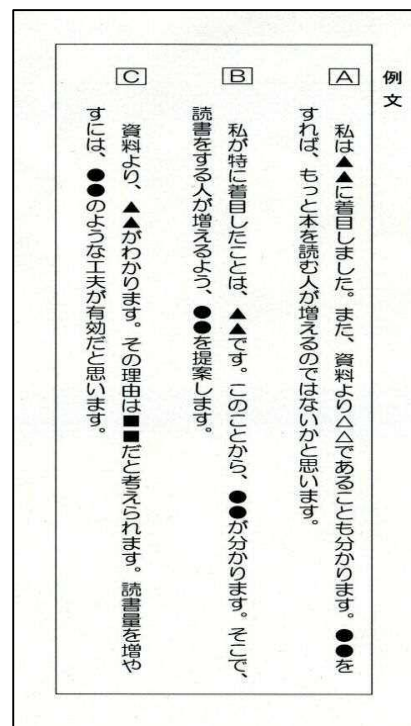
しながら書くよう促した。【図4】は年代別・年度別に示されており、さまざまな視点から

多くの情報を読み取れるグラフであるが、第1次で経験していることもあって活動はスムーズであった。読み取る際に、資料にペンで色分けをしたり印をつけたりしながら、自ら工夫している生徒もいた。ただ、授業後にワークシートを見てみると、この段階で誤った読み取りをしている生徒が数人いることがわかった。次の課題へと進む前に、正しく理解しているかの確認が必要であった。

次に、読書量が減っていることを示す資料【資料10-②】を提示し、その理由を推測して班で話し合った。先に資料から読み取ったことと合わせて、年代別にターゲットをしぼるなどしながら、活発に意見交流が進んだ。「70代の方は視力が悪いからかな」「30～40代の方は仕事が忙しくて時間がないと思う」等の意見が出された。これらの活動を受け、読書をする人を増やすための具体的なアイデアを考え、交流した。

第2時では、資料から読み取ったことと具体的なアイデアをもとに提案文を書く。その際、「型」となる例文を3パターン示した【図5】。自らのワークシートの記述と「型」を組み合わせることで、それほど抵抗を感じることなく書く活動へと進めていくことができた。特に、「書くこと」が苦手な生徒にとって、この例文は参考になったようである。中には、複数の例文を組み合わせてアレンジしている生徒もいて、ある程度書ける生徒にとっては文章の構成を意識しながら書く一助になったのではないかと思う。

授業の最後にペアでの交流の時間を設け、互いの提案文を読み合った。「他の人の文章の構成を見ると、いろいろな工夫がしてあるなと思った」「圧倒的にみんなの文章がすごかった」という感想もあった。



【図5】 「型」となる例文



授業の様子（第3次）

(3) 授業を終えて

① 生徒の感想

授業の理解度や気づきを自己評価したり、次時への意欲づけとするため、振り返りカード【資料3】を活用した。以下は、振り返りカードに記述された生徒の感想の一部である。

- ・資料を見て何かを考えるのは、すごく楽しいです。
- ・資料を読むのが嫌いなので、授業でするとなると「うえっ」となったけど、楽しくなった。この授業ができてよかった。
- ・今回いろいろ資料を読んでみて、最初は資料がテストに出ても苦手で点数もとれなかったけど、理解できるようになった。
- ・今回資料の読み取りをして、苦手だったけど、授業が短く感じてとても楽しかったです。
- ・資料の読み取り方や文章の工夫の仕方がわかった。
- ・最初は難しく時間がかかったけど、最後になるとできるようになった。読み取ったことを文章にするのも楽しかった。
- ・将来に役立つと思った。いつもより多く文章を書けた。

② 研究協力員からの聞き取り

検証授業前後に、研究協力員との打ち合わせの時間を設け、聞き取りを行った。以下は、検証授業を終えた研究協力員の声である。

- ・資料を読み取ることに對して、生徒は抵抗を感じなくなった。
- ・「次はどんなことをするんですか」と尋ねてくる生徒もおり、資料を活用した授業に関心をもたせることができた。
- ・文章をまとめるときの文型を使える生徒が増えた。
- ・書くことが苦手で個別の支援が必要な生徒も、意欲的に学習に取り組み、自ら数行の文章を書けた。そのような姿を見て、自分自身も生徒の反応を楽しみながら、達成感をもつことができた。
- ・個人で考える時間を確保したため、グループでの学習も深まった。
- ・ICTを活用したことにより、生徒は興味をもって意欲的に授業に取り組むことができた。
- ・毎時間の目標を明示したため、生徒も目標を意識して取り組むことができた。

2 結果

(1) プレテストとポストテストに見る変容

検証授業前後に、平成20年度全国学力・学習状況調査（小学校国語A問題）をアレンジした問題を活用し、「資料を読み取る力」「書く力」を把握するためのテストを実施した【資料1】。プレテストとポストテストの結果を比較し、その変容を検証する。

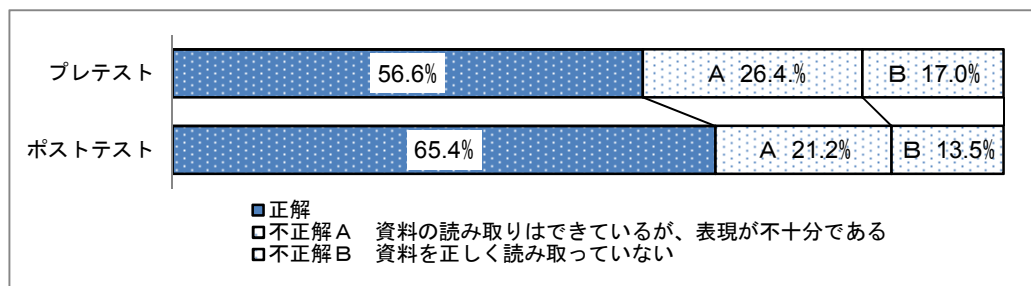
〔問一〕は、目的や課題に即して、資料からわかったことをメモにとることができるかをみるものである。採点基準は、「資料を正しく読み取っているか」と「例示された構文に合わせて記述できているか」の2点とした。〔問二〕では、資料をもとに自分の考えを書く問題を出題した。「特に着目したこと」と、それに対する「自分の考え」を書くことを条件とし、字数の基準は140～180字とした。

① 「テキストから必要な情報を読み取る力」について【図6】

プレテストでは、「資料を正しく読み取っていない」生徒（不正解B）は、17.0%であった。問われている内容が理解できなかったり、資料のどの部分に着目すればいいのかがわからないまま解答している。ポストテストでは、不正解Bは13.5%に減少した。

② 「伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書く力」について【図6】

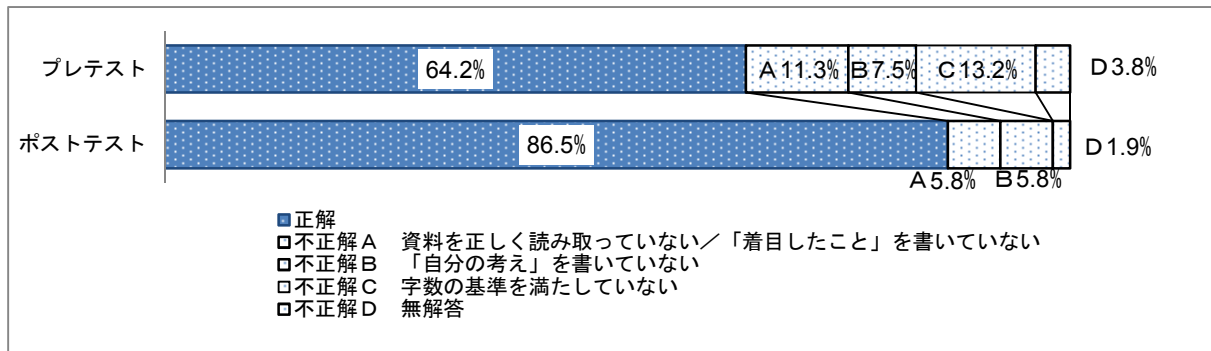
プレテストでは、「資料の読み取りはできているが、表現が不十分である」生徒（不正解A）は、26.4%であった。資料は正しく読み取っているものの例示された構文に合わせて書くことができていない解答が目立った。ポストテストでは、不正解Aは21.2%に減少した。



【図6】 プレテストとポストテストの結果〔問一〕

③ 「テキストを利用して自分の考えを書く力」について【図7】

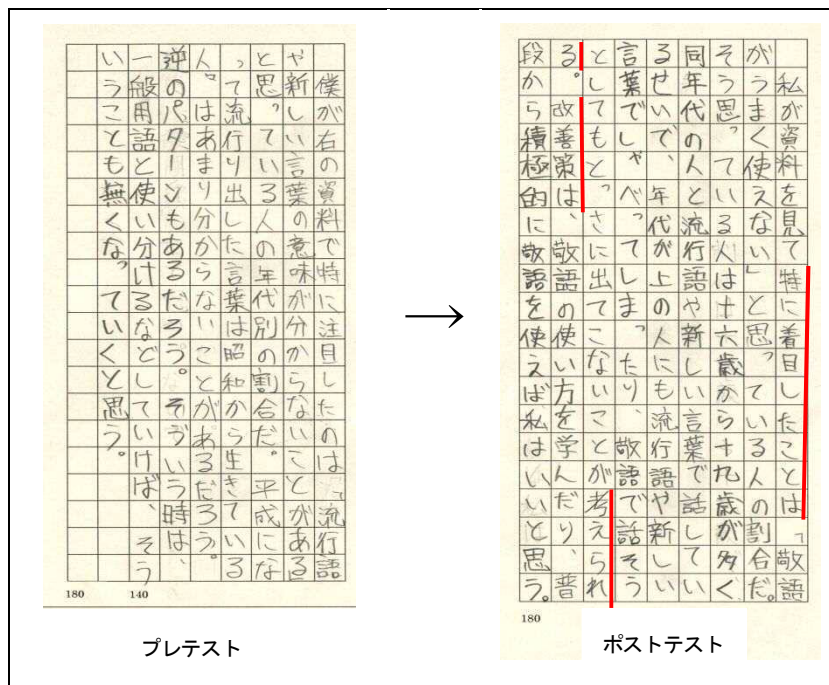
プレテストでは、「字数の基準を満たしていない」生徒（不正解C）が13.2%（7人）おり、この中には検証授業前に実施した意識調査で「書くこと」に対して否定的な回答をした5人も含まれている。2～3行しか書けず途中で諦めてしまう生徒がほとんどで、中には書き出しの一文節を記した後まったく書けない生徒もいた。ポストテストでは「無解答」の生徒（不正解D）は1人で、それ以外は字数の基準を満たすことができた。資料を正しく読み取ったうえで、「自分の考え」を書けた生徒は、64.2%から86.5%へと増加した。



【図7】 プレテストとポストテストの結果〔問二〕

④ 生徒の提案文について

【図8】は、生徒Aのプレテストとポストテストの提案文の比較である。ポストテストでは、第3次で学習した例文の一つである「資料より、▲▲がわかります。その理由は■■だと考えられます。読書量を増やすには、●●のような工夫が有効だと思います」を使用して文章を構成している。まず、資料から読み取ったことを書き、その理由を推測し、さらに改善策を記すことで、意見の根拠を明らかにした文章になっている。



【図8】 生徒Aの提案文

(2) 生徒の意識の変化

検証授業前（10月15日）と検証授業後（11月21日）に、「資料の活用」と「書くこと」に対する意識調査を実施した【資料2】。検証授業前後の生徒の意識の変化について検証する。

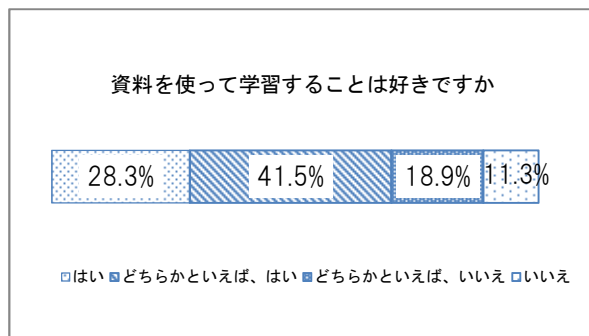
① 「資料の読み取り」について

事前調査では、「資料を使って学習することは好きですか」という質問に対して、30.2%の否定回答があった【図9】。事後調査では98.0%の生徒が「楽しく学習することができた」と回答した。また、「資料の読み取り方がわかった」と回答した生徒も94.0%と高い数値であった【図10】。

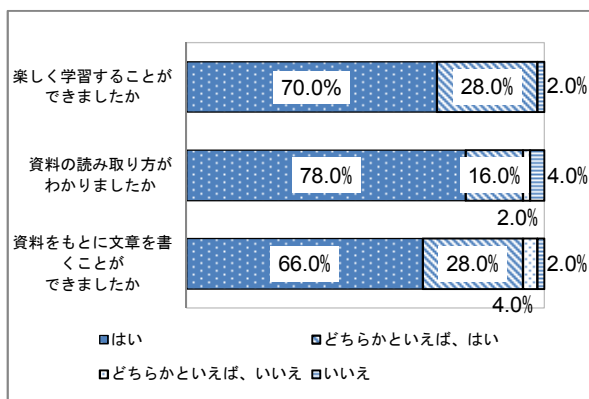
検証授業前後に行った意識調査の結果を比較すると、「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」と回答した生徒は、77.4%から94.0%に増えた【図11】。

② 「書くこと」について

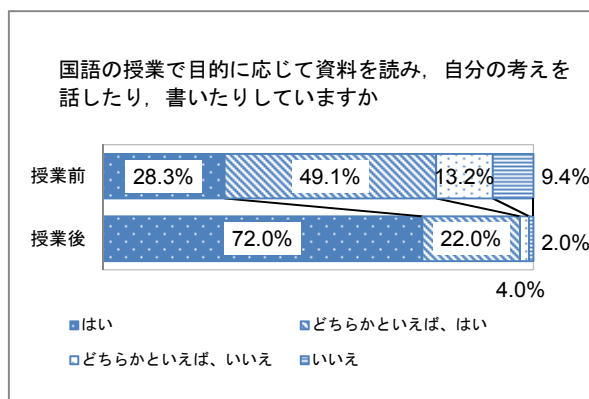
事前調査では、「文章を書くことは好きですか」という質問に対して、35.8%の否定回答があった【図12】。また、「文章を書くとき、困ることはどんなことですか」という質問には、「書き方がわからない」「書きたい内容が浮かばない」「言葉や表現が浮かばない」と回答した生徒が多くいた。8人が「面倒である」と回答し、書くという活動自体に消極的な生徒がいることも明らかになった【図13】。事後調査では、94.0%の生徒が「資料をもとに文章を書くことができた」と回答



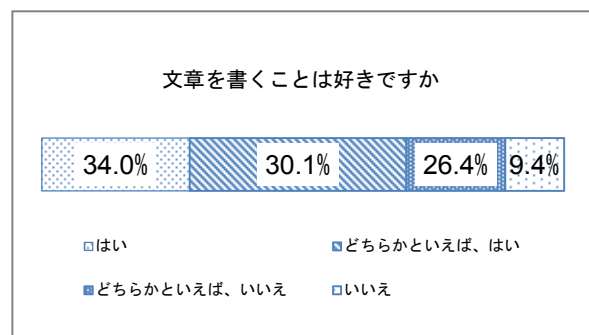
【図9】 生徒意識調査<授業前>



【図10】 生徒意識調査<授業後>



【図11】 生徒意識調査<授業前・授業後>



【図12】 生徒意識調査<授業前>

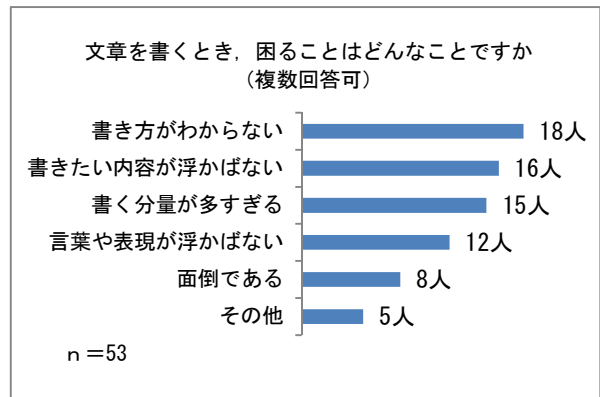
した【図 10】。振り返りカードにも「読み取ったことを文章にするのも楽しかった」「いつもより多く文章を書けた」「文章の工夫の仕方がわかった」等の感想が見られた。

また、検証授業前後に行った意識調査の結果を比較すると、「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いている」生徒は、7.55%から 92.0%に増えた【図 14】。

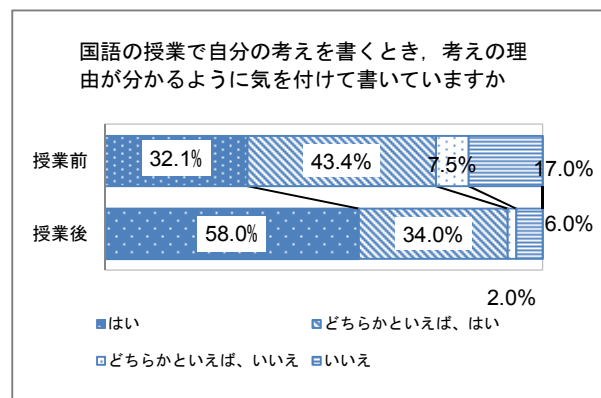
③ 抽出生徒の様子

「書くこと」を苦手とする生徒である。第1次では、何をしたいのかわからず途方に暮れていたが、教師が横について説明し何とか1枚の付箋紙に書くことができた。第2次では、勝敗表を正しく読み取ってはいるが、例文に合わせて文章化することはできなかった。見出しも空欄

のままであった。第3次の提案文は数行書くことができた。プレテストの意見文では「16歳から19」と5マスしか書けなかったが、ポストテストでは規定の字数以上の文章を書くことができた。振り返りカードには、「文章を書くのは好きじゃないけど、あんがい楽しかった」「いつもよりたくさん書けた」との記述があり、書けたことを実感できたようである。授業終了後、「先生、もっとこんな授業してください」と嬉しそうに教師に話す姿もあった。



【図 13】 生徒意識調査<授業前>



【図 14】 生徒意識調査<授業前・授業後>

3 考察

(1) 「テキストから必要な情報を読み取る力」について

授業の導入で資料の読み取り方(注目するポイント・比較するポイント)を確認したことや、授業ごとに難易度をあげながらさまざまなタイプの資料を教材として用いたことは、生徒が情報を読み取る際の目のつけどころを学ぶことにつながった。

「付箋紙の活用」や「箇条書き」により、生徒は一つ一つの情報を整理しながら読み取りを進めていくこととなる。この活動は、資料の細かいところにまで目を向け、必要な情報を正しく読み取る力を育成することに有効であった。その有効性は、「資料を読み取るには、細かいところまで目を向けないといけないことがわかった」「一つの資料でも、どこに着目するかによって色々なことがわかる」等の生徒の感想からもうかがえる。また、個人での読み取りに加えて小グループでの交流場面を設定したことは、個人では気づかなかった視点を得て、さらに読みを深めるのに効果的であった。

さらに、検証授業後、「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」と回答した生徒が増えた【図 11】。第1次では嘘の情報を入れてクイズを出題する、第2次では新聞記者となる、第3次では書店の営業担当者となるという設定を仕組んだことが、「だれに向けて」という相手意識、「何のために」という目的意識を明確にもたせることにつながったと思われる。このことは、文章を書くためだけではなく、資料を読み取る力を育成する点においても重要であると言えるだろう。

(2) 「伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書く力」

「テキストを利用して自分の考えを書く力」について

資料からの気づきはあるものの、それを表現することに難しさを感じる生徒は多い。「読み取った情報を記述するときの表現例」を使って書く活動を取り入れたことや、「型」となる例文を示したことは、表現するうえでのヒントとなり効果が見られた。事前の意識調査で「文章の書き方がわからない」と回答した生徒にとっては「書くこと」への抵抗感を軽減することとなり、また、ある程度書ける生徒にとっては構成を意識して文章を書くことに結びついたと言える。

また、「付箋紙の活用」や「箇条書き」は、思考を整理し文章としてまとめる力を育成するための手だてとして有効であった。その有効性は、「箇条書きにすることによって、あとで文章にするときにもすらすら書けた」「段階をつけて書いていくと、書きたいことがまとまり、いっぱい文章を書くことができた」等の生徒の感想からもうかがえる。

さらに、検証授業後、「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いている」と回答した生徒が増えた【図 14】。資料から読み取ったことが自分の考えの根拠となることを実感し、それをもとにわかりやすく伝えようとする生徒の意識が高まったのだと考える。

VI 研究のまとめ

本研究では、中学校国語科の「書くこと」の領域において、「非連続型テキスト」を活用した指導の授業モデルを構築し、その実践による効果について検証を進めてきた。研究の成果と課題を以下にまとめる。

1 研究の成果

本研究では、「書くこと」の領域において、「非連続型テキスト」を活用した指導の授業モデルの一例を提案した。「読むこと」の領域だけでなく、「書くこと」の領域と関連づけた指導ができたことは、一つの成果だと考える。

「つけたい力」として示した「テキストから必要な情報を読み取る力」「伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書く力」「テキストを利用して自分の考えを書く力」について、プレテストとポストテストの結果や生徒の感想等からも、検証授業における一定の効果を示すデータを得ることができた。必要な情報を読み取るための方法を身につけることで、資料の活用に対する生徒の抵抗感を軽減することができた。また、構成を工夫したり根拠を明かにしたりして文章を書けるようになった生徒の姿や、「書くこと」を苦手とする生徒が「いつもより書けた」と実感する姿が見られた。授業モデルで示した「相手意識・目的意識の明確化」「付箋紙の活用」「箇条書き」「『型』となる例文の提示」「交流の時間の確保」の5つの手だては有効だったと言えるだろう。

以上より、「非連続型テキスト」を活用した指導の授業モデルが、「書くこと」の指導に有効であることを示すことができたと考える。

2 研究の課題

今回は全4時間の取り組みであった。単発的な授業に終わらせず、中学校3年間で系統的に学習を積み重ねていけるような指導計画を確立することが大切だと考える。特に、「書くこと」に関しては、書く機会を多く設定し習慣化する学習が重要となってくる。今回の実践では内容（表現や形式）まで細かく扱うことができなかった。書いて終わりではなく、推敲する時間を十分に確保し、次へつながる学習活動を組み立てる必要がある。

『型』となる例文の提示は、「書くこと」の一つの手だてとして効果が見られたが、これは第一の段階である。生徒が身につけた「型」をどうアレンジし、どう表現するかを指導していくことが、本来の「書く力」の育成へとつながる。「書きたい」「伝えたい」と思えるような課題を設定し、より効果的な手だてを工夫することで、「書くこと」の指導の充実を図っていきたい。

また、「非連続型テキスト」と「連続型テキスト」を関連づけた教材の開発も必要である。目的や課題に応じてグラフや図表などの資料を意図的・計画的に提示し、資料の特性を生かした読み方の指導ができるよう、さらなる「非連続型テキスト」の効果的な活用方法を探っていきたい。

〔引用文献〕

庄司伸子 (2011) 『『非連続型テキスト』を生かした PISA 型『読解力』の授業に関する臨床的研究』

秋田大学教育文化部・大学院教育学研究科 p. 4

光村図書「国語 2」(平成 24 年度用)「方言と共通語」光村図書出版株式会社 p. 204

文部科学省 (2005)「読解力向上プログラム」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/014/005.htm

文部科学省 (2007)「読解力向上に関する指導資料—PISA 調査(読解力)の結果分析と改善の方向」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201.htm

文部科学省 (2008)「中学校学習指導要領解説 国語編」東洋館出版社 pp. 19-20, 111, 113

〔参考文献〕

石井静佳 (2010)『『書くこと』の指導方法の研究—意見文の指導モデル作成を通して—』和歌山県教育センターまなびの丘

岩間正則 編著 (2009)「文科省全国学力調査 中学校国語 B 問題対応の教材開発—知識・技能を活用する『記述式』の課題づくり—」明治図書

国立教育政策研究所 (2014)「平成 26 年度全国学力・学習状況調査報告書 中学校国語」

国立教育政策研究所 (2008)「平成 20 年度全国学力・学習状況調査解説資料 小学校国語」

国立教育政策研究所 (2013)「生きるための知識と技能 5 OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) 2012 年調査国際結果報告書」明石書店

小林美佐子 (2011)『『情報を生かす力』を培う国語科カリキュラムの研究 (読むこと②非連続型テキスト)』全日本中学校国語教育研究協議会

下田好行・長谷川榮・有馬朗人 監修 (2008)「活用力を育てる国語授業 中学校編 PISA 型読解力を育成する授業実践集」日本標準

田中洋一 編著 (2009)「中学校国語科 国語力を高める言語活動の新展開『書くこと』編」東洋館出版社

中村美幸 (2010)『『非連続型テキスト』を用いた文章表現の指導法研究—他教科との関連を視野に入れた国語表現の授業—』神奈川県立総合教育センター

文化庁 (2014)「平成 25 年度 国語に関する世論調査」

三重県教育委員会 (2013)「平成 25 年度第 2 回地域別学力向上推進会議プレゼン資料等」

森川正樹 編 (2010)「どの子も必ず書けるようにする国語授業の勘所—『つまずき』と『ジャンル』に合わせた指導」明治図書

吉楽均 (2012)「非連続型テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める指導—『論理ピラミッド』を用いた解題短作文の授業実践から—」上越教育大学学校教育実践研究センター

四日市市教育委員会 (2014)「平成 26 年度全国学力・学習状況調査結果の分析」

読売新聞 (2014)「読書に関するアンケート調査」(10 月 9 日号) 読売新聞社

【資料3】

振り返りカード 学習日 (月 日)

1年 組 席			
	A	B	C
①	資料から読み取った情報を ふせん紙に書き出すことが できた。		
②	資料から読み取った情報を、 表現例を使って文章にする ことができた。		
<分かったこと>			
<思ったこと>			

振り返りカード 学習日 (月 日)

1年 組 席			
	A	B	C
①	写真に対応する部分を文章か ら探すことができた。		
②	担当するチームの視点に立っ て、勝敗表から読み取った情 報を文章にすることができた。		
③	字数制限にしたがって、見出 しを付けることができた。		
<分かったこと>			
<思ったこと>			

振り返りカード 学習日 (月 日)

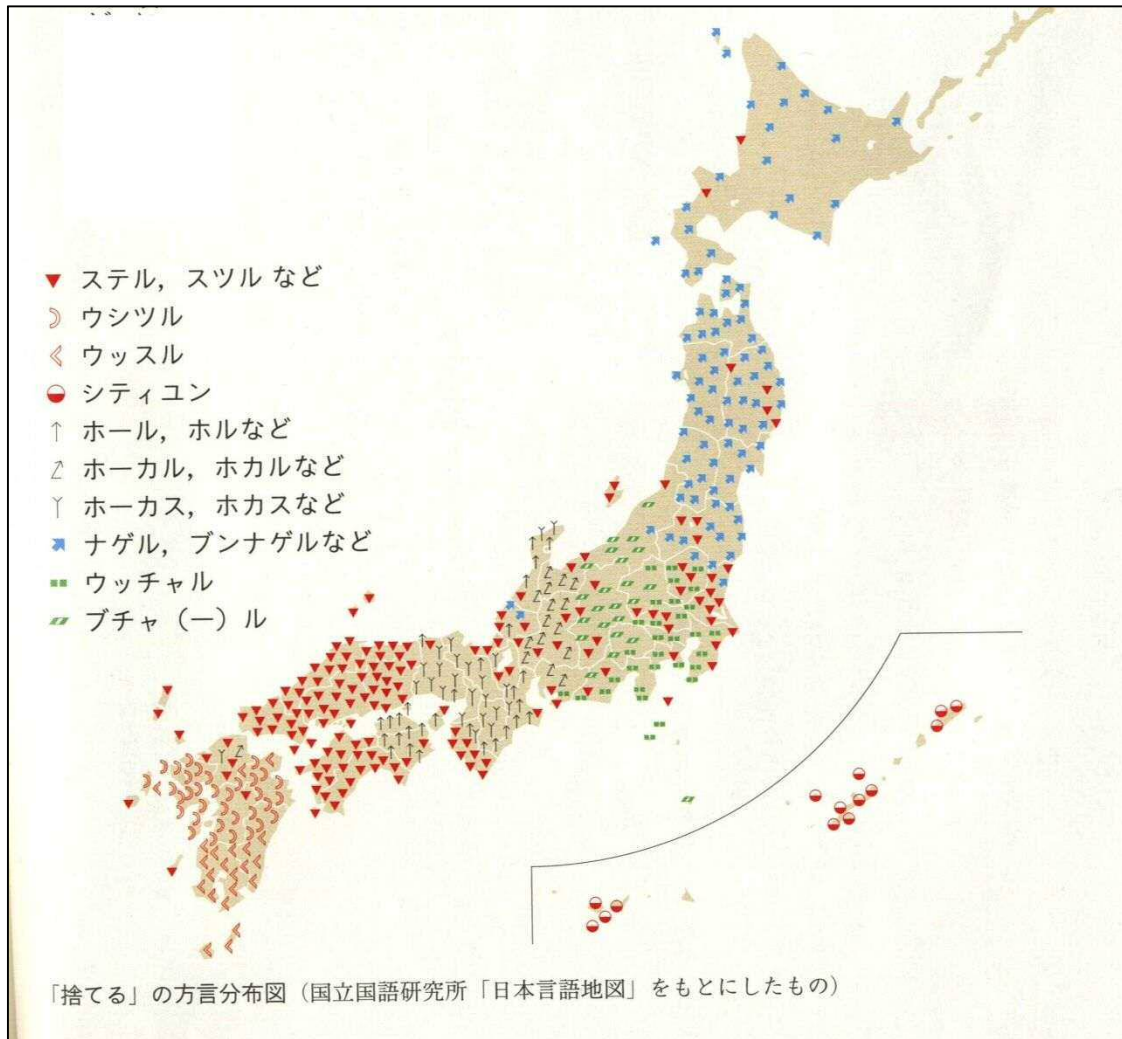
1年 組 席			
	A	B	C
①	「特に着目したこと」を簡条 書きにすることができた。		
②	「具体的なアイデア」を簡 条書きにすることができた。		
③	集めた情報を整理して、文章 の構成を工夫することができ た。		
<分かったこと>			
<思ったこと>			

第1次 指導案 『方言分布図』を読もう！

【資料4】

- ＜ねらい＞
- ・資料から必要な情報を集めるための読み方を身につける。
 - ・資料から必要な情報を集めて、わかったことを的確に表現する。

学習活動	指導上の留意点	手だて
<p>①本時の目標と学習の手順を確認する。</p> <p>②「資料の読み取り方」を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・資料の読み取り方（注目するポイント・比較するポイント）を確認する。 	
<p>③「方言分布図」【資料5】を見て、わかったことや読み取ったことを付箋紙に書く。（個人）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「読み取った情報を記述するときの表現例」を用いて書く。（「～に目を向けると」「～と～を比べると」「～より～の方が・・・だ」等） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「方言分布図」を拡大提示する。 ・「捨てる」の「方言分布図」を用いる。（光村図書「国語2」P 204「方言と共通語」） ・「読み取った情報を記述するときの表現例」を確認する。 	<p>付箋紙の活用</p> <p>「型」となる例文の提示</p>
<p>④付箋紙を台紙に貼って班で交流する。（付箋紙に書き出した内容を観念に即して整理し、読みを深める。）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・付箋紙に書いた内容を声に出して読みあげながらワークシートに貼っていくよう指示する。 	<p>交流の時間の確保</p>
<p>⑤資料から読み取れる事実を短文にし、ホワイトボードに4つ記入する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うち1つは、嘘の内容を入れる。 		<p>相手意識・目的意識の明確化</p>
<p>⑥ホワイトボードを黒板に貼り、班ごとに出题する。他の班は嘘の情報を当てる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・的確に表現している文章を紹介し、表現の工夫の仕方等を確認する。 	<p>交流の時間の確保</p>
<p>⑦振り返りカードを記入する。</p>		



出典：光村図書「国語2」p. 204「方言と共通語」

第2次 指導案 「新聞記者になろう！」

【資料6】

- ＜ねらい＞
- ・新聞記事の文章，図表，写真を関連づけて読み，情報を集める。
 - ・読み取った情報をわかりやすく伝えるための工夫をして，文章を書く。

学習活動	指導上の留意点	手だて
<p>①本時の目標と学習の手順を確認する。</p> <p>②新聞記事を読む。 *「仁川アジア大会男子サッカー決勝T進出に関する記事」(2014.9.22 中日新聞)【資料7】</p> <p>③写真に対応する部分を文章から探す。</p> <p>④勝敗表から読み取った情報を文章化し，記事を書く。 ・「イラク」「クウェート」「ネパール」のうち指定されたチームの視点に立って，勝敗表から読み取った情報を文章化してワークシートに書く。</p> <p>⑤④で担当したチームの視点から，10～15字で見出しをつける。</p> <p>⑥班隊形になり，一人ずつ④⑤を発表する。</p> <p>⑦振り返りカードを記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞記者となって課題に取り組むことを告げる。 ・新聞記事を拡大提示し，大まかな内容を確認する。 ・新聞記事を配布する。 ・写真のみを拡大提示する。 ・新聞記事に傍線を引くよう指示する。 ・各班に3チームの担当が分散するよう，ワークシート【資料8】を配布する。 ・勝敗表の見方について，簡単に解説する。 ・「男子D組の日本はネパールを4-0で下して2勝1敗の勝ち点6とし，2位で1位リーグ突破を決めた。」の記述を参考にして書くよう指示する。 	<p>相手意識・目的意識の明確化</p> <p>「型」となる例文の提示</p> <p>交流の時間の確保</p>

2014 仁川アジア大会

男子快勝 決勝T進出

ネパールに4-0

サッカー男子 1次リーグD組勝敗表

対戦相手	得点	失点	勝	敗	引き分け
①イラク	3	0	1	0	0
②日本	4	0	1	0	0
③クウェート	3	1	1	0	0
④ネパール	0	4	0	1	0

※ 〇は決勝トーナメント進出

サッカー

男女1次リーグが行われ、男子D組の日本はネパールを4-0で下して1勝1敗の勝ち点6とし、2位で1次リーグ突破を決めた。25日の決勝

堅守崩す攻撃に光

守備を固められた時、相手を守り崩すか。日本は守備の堅さを崩すようなプレーが後半9分に生まれた。

左サイドからMF矢島(浦和)が相手ディフェンスの間を射抜く、鋭いパスを斜めに出した。その軌道にいた鈴木

▽男子1次リーグD組
日 本 4-0 ネパール
(6) 3-0 (0)
▽得点者 日 野津田(前)、中島(後)の鈴木(後)の鈴木(後)

トーナメント1回戦でC組1位のパレスチナと対戦する。前半に野津田(広島)のゴールで先制した日本は、後半に中島(FC東京)が追加点を挙げ、鈴木(新潟)の2得点で突き放した。D組のもう1試合はイラクがクウェートを3-0で退け、3連勝で1位通過を決めた。



日本-ネパール 後半9分、2点目のゴールを決める中島=共同

がスルー。最終ラインと中盤の間に入り込んだ中島がボールを受け、一気に最終ラインを突破する。GKとの1対1あるプレーが、狭いエリアに

密集するディフェンスの隙を突き、スペースに中島が侵入できた。よく練習している形。鈴木はしてやったりの表情を浮かべた。

5バックで守るネパールに前半の日本は手を焼いた。今大会だけでなく、2年後に控えるリオデジャネイロ五輪のアジア予選でも、格上の日本に対し、同様の戦い方をするチームが多いだろう。

先制点を挙げた野津田のミドルシュートも、ゴール前を固める相手を攻略する形の一つ。いろいろなバリエーションを持って戦うことができようになつてきたと、チームの成長を実感する指揮官。1次リーグで敗れたイラクと決勝で再戦する道筋も、おぼろげながら見えてきた。

(深世古峻)

中日新聞「仁川アジア大会サッカー決勝T進出に関する記事」
(2014年10月22日号)

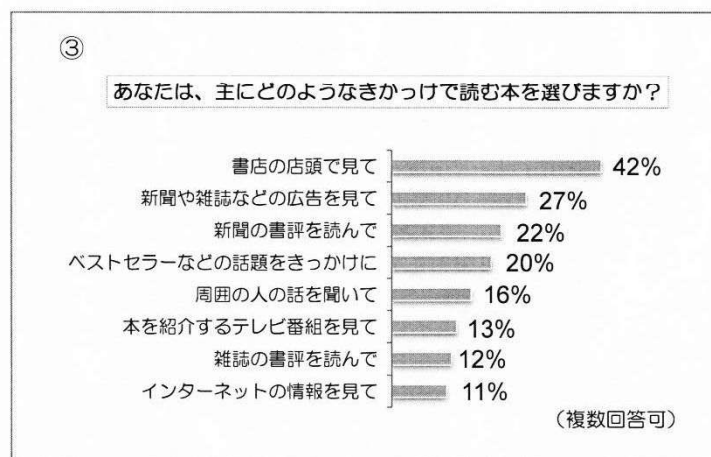
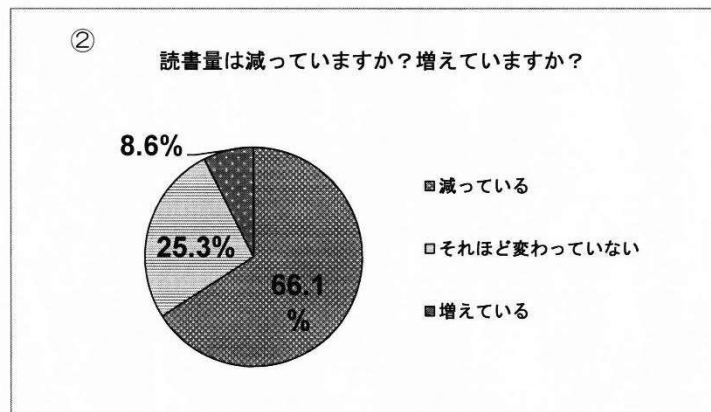
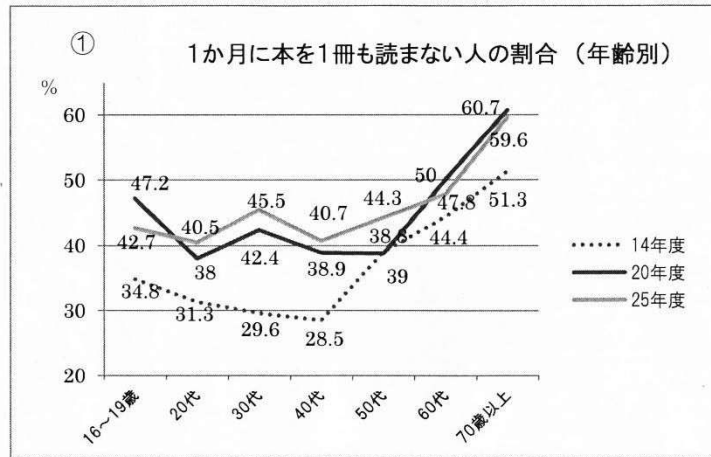
第3次 指導案 「資料をもとに提案しよう！」

【資料9】

- ＜ねらい＞
- ・複数の資料から必要な情報を収集し活用する。
 - ・集めた材料を整理して、文章の構成を工夫する。

学習活動	指導上の留意点	手だて
<p>〔第1時〕</p> <p>①本時の目標と学習の手順を確認する。</p> <p>②「1ヵ月に本と一冊も読まない人の割合」【資料10-①】を見て、わかったことや読み取ったことをワークシートに箇条書きにする。</p> <p>・「読み取った情報を記述するときの表現例」を用いて書く。</p> <p>③「読書量増減の円グラフ」【資料10-②】を見て、読書量が減っていることを知る。</p> <p>④読書量が減っている理由を推測し、班で話し合う。</p> <p>⑤書店の営業担当となり、読書をする人を増やすための「具体的なアイデア」を考えて、箇条書きにする。</p> <p>⑥振り返りカードを記入する。</p>	<p>・書店の営業担当者となって課題に取り組むことを告げる。</p> <p>・【資料10-①】とワークシート【資料11】を配布する。</p> <p>・第1次の学習を振り返り、「読み取った情報を記述するときの表現例」を確認する。</p> <p>・【資料10-②】を提示する。</p> <p>・年代別にターゲットをしぼるなどして、理由を推測させる。</p> <p>・アンケート調査で明らかになった「読書量が減っている理由」の資料を提示する。</p> <p>・「本を選ぶきっかけ」の資料【資料10-③】を配布し、「具体的なアイデア」を考える際のヒントとして活用してもよいことを告げる。</p>	<p>手だて</p> <p>相手意識・目的意識の明確化</p> <p>箇条書き</p> <p>「型」となる例文の提示</p> <p>交流の時間の確保</p> <p>箇条書き</p>

<p>〔第2時〕</p> <p>①本時の目標と学習の手順を確認する。</p> <p>②前時に考えた「具体的なアイデア」を班で交流する。</p> <p>③「特に着目したこと」「具体的なアイデア」をもとに、提案文を書く。</p> <p>④班隊形になり、一人ずつ発表する。</p> <p>⑤振り返りカードを記入する。</p>	<p>・参考にしたい意見などがあれば、色ペンでメモするように指示する。</p> <p>・『型』となる例文を参考にして書くよう指示する。</p>	<p>交流の時間の確保</p> <p>「型」となる例文の提示</p> <p>交流の時間の確保</p>
---	---	--



**「非連続型テキスト」を活用した「書くこと」の指導に関する研究
－授業モデルの構築とその効果－**

〔研究協力員〕 四日市市立三重平中学校 教 諭 田中 恵子

〔執 筆 者〕 四日市市教育委員会 長期研修員 永野 智美

〔指導・助言〕 国立教育政策研究所 総括研究官 松尾 知明

研究調査報告 第396集

**「非連続型テキスト」を活用した「書くこと」の指導に関する研究
－授業モデルの構築とその効果－**

発 行 平成27年3月20日

発行所 四日市市教育委員会教育支援課

四日市市諏訪町2番2号

電話 (059) 354-8149

FAX (059) 359-0280
